



—時代にそくした最良の知を人の心と、その道程の先に鑑す—

株式会社ゼンリン様

日本の地図文化継承と振興を目指した取り組み

「西洋人の描いた日本地図
～マルコ・ポーロからシーボルトへ～」

2019年3月24日(日)～31日(日)、東京都渋谷区のBunkamuraにて16～19世紀の西洋古地図を紹介する「西洋人の描いた日本地図～マルコ・ポーロからシーボルトへ～」が開催された。西洋人の描いた古い日本地図を一目見ようと訪れた来場者で連日にぎわった。同展は日本最大手の地図会社である株式会社ゼンリンが地図文化継承と振興の取り組みの一つとして行ったもの。その開催や舞台裏について担当者にお話を伺った。

企画展概要

テーマ：西洋人の描いた日本地図
～マルコ・ポーロからシーボルトへ～

開催期間：2019年3月24日(日)～3月31日(日)

開館時間：10:00～19:30 ※最終日は17:00まで

会場：Bunkamura Box Gallery
東京都渋谷区道玄坂2-24-1

入場料：無料

地図情報の調査や制作を行う株式会社ゼンリンが「日本の地図文化継承と振興」を目的として開催。地図を通して当時の人びとの営みや世界観を知ることが企図した企画展は、2274名の来場者が訪れる盛況の中で幕を閉じた。



2019年3月末、桜がほころびはじめた東京渋谷にて、企画展「西洋人の

描いた日本地図～マルコ・ポーロからシーボルトへ～」が開かれた。日本の

西洋古版日本地図コレクション



株式会社ゼンリンは、かねてより取り組んできた地図文化振興に一層力を入れるため、創業70周年を機にイギリス人J・C・ハバード氏旧蔵の「西洋古版日本地図コレクション」を取得しており、今回の企画展がその初の一般公開の場となった。16世紀～19世紀の西洋で描かれた日本古地図の一大コレクションであるが、ひも解くと当時のヨーロッパから日本がどのように映っていたかが見て取れる。厳選した約30点の地図をストーリー立てて展示し、日本が地図上で変遷するさまを紹介した。



Section 1

想像で描かれた黄金の国「ジパング」から実在の国「日本」へ

日本が初めて西洋の地図に現れたのは15世紀の大航海時代のこと。当時は全くの想像で描かれ、位置も形も実際とかけ離れていた。16世紀中頃以降、ヒトやモノの交流を通じて、

実在の日本の知識や情報が西洋に伝わるようになり、徐々に日本の形は正確さを増した。



ポルドーネ「日本図」
1528年
単独の日本図として西洋で初めて印刷された。ポルトガル人の来日以前にまったくの想像で描かれたもの



オルテリウス/ティシェイラ「日本図」
1595年
形の整った画期的な日本図がついに登場。同時代の日本の地図等複数の情報源に基づく

Section2

近代日本地図の夜明けと鎖国時代の日本地図

1582年の天正遣欧使節をきっかけとした日欧の文化交流は、西洋における日本地図製作に長足の進歩をもたらした。しかし1639年に日本が鎖国に入ると状況が一変。日本の情報は

ごく限られたものとなり、日本地図製作は後退が目立つようになる。



ブランクス/モレイラ「日本図」
1617年
現存は世界で1点のみ。西洋人地図製作者の測量に基づく実態に近い日本図



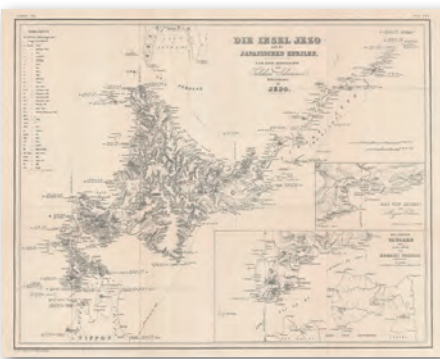
ケンペル「日本誌」
1727年
19世紀に至るまで西洋人の日本観を決定づけた名著に収録された地図。ブランクス/モレイラに比べ正確性では劣る

Section3

シーボルトの日本図 — 西洋製日本地図の完成

1823年来日したシーボルトは、医学を教授する傍ら日本研究を進め多数の資料を収集した。帰国時に幕府の秘図とされていた伊能図等の持ち出しが発覚（シーボルト事件）。模

写によりひそかに持ち出した伊能図をもとに日本図を刊行し、北海道・千島・樺太を含む日本の正確な地形を広く世界に紹介した。



シーボルト「蝦夷と日本領千島地図」
1852年
シーボルト不朽の名著『日本』所収。現代の衛星写真のように正確な北海道図



ペリー/ホークス編「ペリー艦隊日本遠征記」
1857年
米国海軍提督ペリーの日本遠征記。シーボルトの日本図を原図にした正確な地図を収録

ご担当者インタビュー

株式会社ゼンリン総合企画室広報担当の新井啓太様に、本企画展および今後の展望について伺った。

— 本企画展の実施に至ったきっかけや経緯、開催の目的を教えてください。

新井様：2018年の創業70周年をきっかけに、以前から取り組んできた社会貢献活動により一層力を入れる気運が高まりました。その一環として西洋古地図コレクションを取得し、最初の企画展を東京でやろう、という流れになりました。

— 社会貢献活動の一環として、企画展をおやりになることになったのですか。

新井様：はい。当社ゼンリンは地図に携わる企業として、地図データのアップデートや最前線の地図技術開発、データ整備に取り組んでいます。常に未来に向かって邁進する一方、社会貢献活動としては「地図文化の振興」を掲げ取り組んでいます。今回の企画展はまさにそれを体現するものでしたので、ご来場いただくみなさまに対して、地図の新しい気づきや楽しさに触れてもらいたいという想いがありました。そのための古地図コレクションの見せ方や面白さの伝え方は工夫しました。

— 準備期間にご苦労されたこと、不安などはありましたか？

新井様：さまざまな制約の中でいかに伝えるか、というところが最も苦労しました。地図についてもコレクションについても、伝えたいことはたくさんありましたが、限られたスペースの中での展示構成や、限りある文字数の中で個々の地図の持つ魅力やストーリーを表現するには苦心しました。多くのお客様が地図の理解を深め、楽しめる展示を作ることが、今後の課題です。また、スペースの制約に関連することですが、キャプションの文字が小さくなってしまったことや、地図の一部の展示位置が見つらなかったことも反省点です。

— 伝えたいことを余すことなく、かつ分かりやすく伝える工夫が必要なのですね。

新井様：これは社会貢献活動特有の難

しさでもあるのですが、伝えたいことをストレートに言葉で表現できるものではありません。例えば「地図文化の発展」にしても「暮らしの向上」にしても、それをそのまま言葉にすることにはあまり意味はなくて、その想いを何らかの形にしたものから、見て頂く方それぞれに感じ取っていただく。そこに表現することの難しさがあります。

— 企画展の開催中に印象に残ったことはありましたか？

新井様：ある方かけられた、「地図ってみんな本質的には好きなんだよね」という言葉が印象的でした。今回の企画展はまさにそれを裏付けるものだったと感じます。たまたまふらりと立ち寄られたご年配の女性が、想像で描かれた日本地図をニコニコとご覧になられて、楽しんでいただけるのも地図ならではのと思いました。スマートフォンを開けば10秒で地図が立ち上がるほど、人々にとって地図が身近な存在として価値が高まっている今の時代だからこそギャップを楽しんでいただけたのかもしれない。

— ご来場の方々は大変満足されていたのですか。2274名と大勢の方が来場されました。

新井様：会場ではアンケートを取りましたが、ポジティブな意見が多かったです。今回のコレクションの価値は、こちらからはあえて伝えなかったにも関わらず、「すばらしいものを見せて頂きました」と言っていたことが嬉しかったです。今回最も苦労した展示構成・ストーリー、地図解説などがあってこそですが、素直に地図を楽しんでいただけたのだと思います。

ご来場の方々とお話しして感じたことは、ステークホルダーとの接点を作ることの大切さです。当社のようなB to B事業ですと、普段の業務の中ではなかなか一般の方の生の声をお聞きする機会がありません。企画展を行ったことで、みなさまの地図に対する考えを知ることができましたし、中には地図だけでなく、ゼンリンに期待することについて語ってくださった方もいました。そうした普段聴けない声を聴くという点でも、企画展を行って良かったと感じます。

— 企画展は取り組みの第一弾とのことですが、今後のご計画や想いについて教えてください。

新井様：企画展は第一弾として、「地図文化の“振興”」の部分を行いました。今後は「地図文化の“継承”」に新たに取り組んでいきます。これからの時代、地図は「人が読むもの」から「機械が読むもの」に変わっていきます。その転換の中でも、地図のプレゼンスを維持し、社会インフラとしての地図の存



新井啓太様

在価値に気づいてほしいという想いがあります。外部環境により地図の形が変化しても、地図本来の揺るがない価値はあります。人々に地図の楽しさや価値に気づいていただくきっかけを提供するために、今後もさまざまな取り組みを行っていきます。それがゼンリンの事業そのものへ還元されれば理想です。



子細な地図情報をアップデートし続け、未来の地図を開発するゼンリン。それだけでなく過去の地図をひも解くことで地図そのものを文化にしていきたいという、地図愛と熱意に支えられた催しでした。社名の由来である「善隣」は、「平和でなければ地図作りはできない」という創業者の想いが込められています。国家機密だった時代の地図を並べた企画展は、同社の創業の理念を体現したようにも感じられました。今後のますますの取り組みに期待したいです。